

児童文学からへ未来へへ ①

「できること」と「できないこと」の境界

井上乃武

現在、(児童)文学を取り巻く状況は決して明るくない。そのなかで、(児童)文学、あるいは「物語」を読む意味はどこにあるだろうか。

1 物語を「読む」こと

なぜ『目をさませトラゴロウ』の語り手は、わざわざ「きみたちが、トラゴロウにあうのは、トラゴロウのおはなしを、よむときだけだ」とことわってから物語を始めるのだろうか。もちろん、この一文を含む「はじめに」は、一義的には「トラゴロウが、きみたちのまわりには、いない」、言い換えれば、フィクションと現実は決してイコールにはならないことを読者に印象づけるために書かれている。だが、たとえそうだとしても、それではなぜ「きみたち」という言葉が用いられるのだろうか。

本題に入る前に、『目をさませトラゴロウ』が伝えたかったものについて、もう少し見ておこう。「きばをなくす

と」という短編で、自分のきばをなくしたトラゴロウは、彼に食べられてしまうことを怖れる動物や人間に対して、きばが一本足りないから彼らを食べたりしない、と言って、きばのありかにつながる情報を聞き出す。だが、きばを取り戻したあと、トラゴロウは自分のした約束を反故にして、自分の嫌いなみみずやくさったじゃがいもやかれくさ、それに自分の牙で作ったスープを食べさせた動物や人間を次々に食べてしまう。このように、『目をさませトラゴロウ』は、基本的にトラゴロウがやりたい放題するお話であり、なかでも「きばを、なくすと」は、食べ物のすききらいの問題を取り上げることで、トラゴロウと読者である子どもたちの距離を限りなく小さくしている。

だがその一方で、作者である小沢正は、評論「ファンタジーの死滅」(『日本児童文学』一九六六年五月号)のなかで、「おとなたちはそれらのファンタジーによって、悪漢を追い得ない現実的な状況から、子どもたちの目を閉ざしてい